

# ■ 2026年度 入試問題分析シート ■

名古屋大学

前期日程

科目	生物
----	----

総括

難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

**〈総論〉**

大問数は昨年と同様に3題であった。論述問題の字数が昨年度に減少したが、今年度も昨年度と同程度であった。情報量が多く、設問数も多いため、時間的にはかなり厳しい試験と言える。

**〈特記事項・トピックス〉**

どの大問も受験生が見たことのない目新しい素材を扱っている。与えられたヒントやデータを正確に読み取り、その情報を整理し、合理的な仮説を設計することが必要となる。また、設問どうしが内容的につながっている場合が多く、大問全体としての流れに乗ることもポイントとなる。

**〈合格への学習対策〉**

どの問題も、学んだ複数の知識を組み合わることや、過去に取り組んだ問題の中から類似の実験やイメージの近い現象を手繰り寄せて考察することで正解に近づくことができる。よって、用語を丸暗記するような学習ではなく、質の高い使える知識を習得し、十分量の適切な訓練をすることが重要となる。また、論述問題の字数制限はないが、解答欄が比較的狭いので、無駄なことを省きコンパクトに論述できるように訓練をしたい。

## 設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
I	記述 選択 論述	生物	遺伝情報の発現 神経細胞のはたらき 分子進化速度	設問(5) 重複に気を付けて数える必要がある。 設問(6) K <sup>+</sup> の流出による再分極が起こり、カリウムチャンネルが閉じることによってナトリウムチャンネルが開けるようになると考えられる。下線部にある、カリウムチャンネルは繰り返し開閉するという記述がさりげないヒントになっている。 設問(9) 分子進化速度が小さいことから、機能上重要な領域と考えられる。	やや難
II	記述 選択 論述	生物	情報伝達物質の受容体 突然変異と抗がん剤 酵素反応速度	設問(2) タンパク質Eの性質ではなく、細胞の性質について求められている。 設問(3) 図4の2つのデータに基づき、二量体になるかどうかとリン酸化の有無の両方に言及した答案を作成したい。 設問(4) 化合物AはATPと類似した構造をもつ。 設問(5) 設問(4)の解答を踏まえて考察する。	標準
III	記述 選択 論述	生物基礎 生物	植物の葉の成長と適応	設問(4) どちらの実験区についても、中位葉は強光条件で生じて成長している。一方、非遮光区の上位葉は強光条件で生じて成長したのに対し、遮光区の上位葉は弱光条件で生じて成長している。 設問(6) 中位・下位の葉は、有機窒素化合物に占めるクロロフィルの割合が高いことがわかり、これについての合理的な理由を考察する。	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。